

そう だい
総 題 「エフェソの信徒への手紙」

だい じ ゅ っ か おとと つま じ ゅ う じ か もと と も い
第 10 課 夫と妻——十字架の下に共に生きる

さなだ おさむ
真田 治

いち あんそくにちご
1. 安息日午後

ふだん わたし かみ き りよういん さんぽつや い いま じんせい いちど びよういん
私は髪を切ってもらうときに、理容院(散髪屋さん)に行きます。しかし、今までの人生で一度だけ美容院
(パーマ屋さん) に行ったことがあります。自分の結婚式の数日前のことです。結婚式の当日の朝は自分で自分
の髪をセットしなければならぬので、結婚式に適した髪形を数日前に美容師さんに教えてもらおうと思ったの
です。

けっこん どうじ わたし ところざわきようかい ぼくし ところざわきようかい ちか びよういん わたし い
結婚した当時の私は所沢教会で牧師をしていました。所沢教会の近くにある美容院で、私は言いま
した。

「すぐ近くにある教会で私は牧師をしています。今度の日曜日に結婚します。結婚式にちょうどいい髪形に
セットできるように教えてください。」

すると、美容師さんは質問なさいました。「奥さまになる女性も、教会の人ですか？」

「はい、そうです」と私が答えると、美容師さんは言われました。「うらやましいですね。同じ信仰の人同士で
結婚できて、うらやましいですね。私は何回もお見合いをしたことがありますが、価値観が合う人と、ぜんぜん出会
うことができないんです。同じ価値観の人と結婚できて、すてきですね。うらやましいですね」

同じ信仰、同じ価値観の男性と女性が結婚して夫と妻になることは、すてきですね。夫として、妻として、
ひとりひとりの人間として、すてきな生き方をするための大切な価値観を、今週は学びます。

に にちようび つま すす
2. 日曜日：クリスチャンの妻たちへの勧め

げんだい にほん けっこんしき ひろうえん けっこん はなむこ
現代の日本の結婚式では、披露宴などで、「ケーキカット」をすることがあります。結婚したばかりの花婿と
花嫁が、2人が力を合わせてする最初の仕事として、ケーキを切るのだそうです。

しかし私たち夫婦は、夫婦が力を合わせる最初の仕事として、結婚式で声を合わせて暗唱聖句をしました。

わたし ふうふ あんしょう せいしよ かしよ しょさんしょうじゅうに じゅうきゆうせつ
私たち夫婦が暗唱した聖書の箇所は、コロサイ書 3 章 12～19 節でした。

コロサイ書 3 章 18 節を読んでみましょう。

つま しゅ しん もの おとと つか
「妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。」

に しょごしょうにじゅうにせつ か しょごしょうにじゅうにせつ よ
似たことがエフェソ書 5 章 22 節にも書いてあります。エフェソ書 5 章 22 節を読んでみましょう。

つま しゅ つか じぶん おっと つか
「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。」

つま つか いちばんたいせつ あいて しゅ
妻が仕える一番大切な相手は主イエスさまです。

つま しゅ いちばんたいせつ い
妻は、主イエスさまを一番大切にして生きます。

つま じぶん しゅ たいせつ い
妻は、自分よりも、主イエスさまを大切にして生きます。

じぶん しゅ たいせつ つま じぶん おっと たいせつ い
自分よりも、主イエスさまを大切にするように、妻は自分よりも、夫を大切にして生きます。

おっと しゅ いちばんたいせつ い
もちろん夫も、主イエスさまを一番大切にして生きます。

おっと じぶん しゅ たいせつ い
もちろん夫も、自分よりも、主イエスさまを大切にして生きます。

じぶん しゅ たいせつ おっと じぶん つま たいせつ い
自分よりも、主イエスさまを大切にするように、夫は自分よりも、妻を大切にして生きます。

おっと つま しゅ いちばんたいせつ い
夫も妻も、主イエスさまを、一番大切にして生きます。

しゅ たいせつ い おっと つま おな かちかん
主イエスさまを大切にして生きることが、夫にとっても妻にとっても、同じ価値観であれば、すてきですね。

さん げつようび きょうかい はなよめ いち 3. 月曜日：教会はキリストの花嫁（その1）

わたし ふうふ けっこんしき ふうふ ちから あ さいしょ しごと あんしょうせいく きのう か
私たちが夫婦は結婚式で、夫婦が力を合わせてする最初の仕事として暗唱聖句をしたら、昨日も書きましたね。暗唱した聖書の箇所は、コロサイ書3章12～19節でした。

しよさんしょうじゅうきゅうせつ よ
コロサイ書3章19節を読んでみましょう。

おっと つま あい あ
「夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない。」

に しよしょうにじゅうごせつ か しよしょうにじゅうごせつ よ
似たことがエフェソ書5章25節にも書いてあります。エフェソ書5章25節を読んでみましょう。

おっと きょうかい あい きょうかい ごじぶん あた つま あい
「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。」

きょうかい あい しよしょうにじゅうごせつ か せいしょ か きょうかい
「キリストが教会を愛し」とエフェソ書5章25節には書いてあります。聖書に書いてある「教会」とは、建物のことではありません。聖書に書いてある「教会」は、主イエス・キリストを信じて救われる人たちのことです。（教会の建物のことは、聖書には「会堂」と書いてあります。）

しゅ わたし にんげん あい しゅ わたし にんげん しん すく
主イエス・キリストは私たち人間を愛してくださっています。主イエス・キリストは私たち人間が信じて救われるように、私たち人間を罪の責任を取って十字架で亡くなくなってくださいました。十字架の主イエス・キリストを信じて生きることが、夫にとっても妻にとっても同じ価値観であれば、すてきですね。

おお かてい おっと せたいぬし おっと かてい せきにんしゃ おっと かてい まも せきにん つま まも
多くの家庭では夫が世帯主です。夫は家庭の責任者であり、夫には家庭を守る責任があります。妻を守るためなら、どんなことでも夫はします。主イエスさまが教会を愛するように、夫は妻を愛しているからです。

わたし にんげん すく しゅ せきにん と ごじぶん あた おっと つま まも
私たち人間を救うために主イエスさまが責任を取って御自分をお与えになったように、夫は妻を守るために、自分で責任を取ります。夫は妻に、つらく当たりません。夫は妻を愛しているからです。

しゅ じゅうじか おっと しん きょうかい あい おっと つま あい
主イエス・キリストの十字架を夫は信じているので、キリストが教会を愛するように、夫は妻を愛します。十字架の主イエス・キリストを信じて生きることが、夫にとっても妻にとっても同じ価値観であればすてきですね。

4. 火曜日：教会はキリストの花嫁（その2）

聖書に書いてある「教会」とは、主イエス・キリストを信じて救われる人たちのことです。

エフェソ書5章27節に「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした」と書いてあるのは、主イエスさまを信じて救われた人たちは、汚れのない聖なる姿に変えられて主イエスさまの前に立つことができる、という意味です。

セブンスデー・アドベンチストの結婚式では、ステージの中央に牧師が立ち、牧師の横に花嫁が立ちます。そして花嫁は、父親と腕を組んでバージンロードを歩いて入場します。花嫁がステージに近づくと、花嫁はステージから下りて花嫁を迎えます。花嫁の父親は娘である花嫁を花嫁に引き渡し、花嫁と腕を組んだ花嫁は、花嫁を連れてステージに上がるのです。最初はステージに立っていたのは牧師と花嫁だけでしたが、牧師の前には、今、花嫁と花嫁が立っています。（花嫁の父親がいない場合、他の人が父親の代わりに花嫁と一緒にバージンロードを歩くことがあります。）

セブンスデー・アドベンチストの結婚式では、牧師は天の父なる神さまを意味し、花嫁は主イエス・キリストを意味します。そして花嫁は、主イエスさまを信じて救われた教会を意味しています。ステージは天国を意味します。

花嫁がステージから下りて花嫁を迎えるのは、信じて救われた人々を天国に迎え入れるために、主イエスさまが天国から下りて来られる再臨を意味しています。天国を意味するステージに上げられる花嫁は、汚れのない聖なる姿に変えられている栄光の教会を意味します。栄光の教会を表現するために、花嫁はウェディングドレスを着ています。主イエスさまが「教会を救うために私は十字架にかかりました。私は教会を愛しています」と父なる神さまに表明なさるように、花嫁は「私の妻になる花嫁を私は愛しています」という気持ちで牧師の前に立ちます。花嫁は、「私の夫になる花嫁は、私のためならば命を捨てるほどに私を愛しています。だから私は夫に仕えます」という気持ちで牧師の前に立ちます。

教会員ではない方々がセブンスデー・アドベンチスト教会で結婚式を挙げることもあるでしょう。もしも教会員でなかったとしても、結婚式の前に、上に書いたような結婚式の意味を牧師から教えてもらおうと良いです。キリストを信じて生きることが、夫にとっても妻にとっても同じ価値観であれば、すてきですね。

5. 水曜日：自分の体のように妻を愛しなさい

結婚式では、「誓約」という場面があります。「誓約」では、牧師が花嫁に対し、「あなたは、今あなたが手を取っている女性を愛し、健やかなときも病めるときも、富めるときも貧しいときも、堅く節操を守ることを誓いますか？」等と質問し、花嫁は「はい」と答えます。次に牧師は、花嫁に対して「あなたは、今あなたが手を取っている男性を愛し、健やかなときも病めるときも、富めるときも貧しいときも、堅く節操を守ることを誓いますか？」等と質問し、花嫁は「はい」と答えます。花嫁だけが「はい」で花嫁が「いいえ」では、結婚は成立しません。花嫁が「はい」で花嫁が「いいえ」でも、結婚は成立しません。夫婦は、愛することにおいて一体でなけ

ればならないのです。

「節操^{せつそう}を守る^{まも}」とは、夫^{おっと}は妻^{つま}をいつも一番大切^{いちばんたいせつ}な女性^{じょせい}として愛^{あい}し、妻^{つま}は夫^{おっと}をいつも一番大切^{いちばんたいせつ}な男性^{だんせい}として愛^{あい}するという意味^{いみ}です。

エフェソ書^{しよごしやうにじゅうはっせつ} 5 章 2 8 節^よを読んでみましょう。

「そのように夫^{おっと}も、自分^{じぶん}の体^{からだ}のように妻^{つま}を愛^{あい}さなくてはなりません。妻^{つま}を愛^{あい}する人^{ひと}は、自分自身^{じぶんじしん}を愛^{あい}しているのです。」

夫^{おっと}は自分^{おっと}の体^{からだ}を大切^{たいせつ}にするように、妻^{つま}の体^{からだ}を大切^{たいせつ}にします。妻^{つま}も自分^{つま}の体^{からだ}を大切^{たいせつ}にするように、夫^{おっと}の体^{からだ}を大切^{たいせつ}にします。夫^{おっと}は自分^{おっと}の気持ち^{きもち}を大切^{たいせつ}にするように、妻^{つま}の気持ち^{きもち}を大切^{たいせつ}にします。妻^{つま}も自分^{つま}の気持ち^{きもち}を大切^{たいせつ}にするように、夫^{おっと}の気持ち^{きもち}を大切^{たいせつ}にします。夫^{おっと}は妻^{つま}を愛^{あい}し、妻^{つま}は夫^{おっと}を愛^{あい}します。夫^{おっと}と妻^{つま}は一体^{いったい}なのです。

6. 木曜^{もくようび}日^{にち}：結婚^{けっこん}の模範^{もはん}としての「一体^{いったい}」

結婚式^{けっこんしき}の最後^{さいご}の「宣言^{せんげん}」という場面^{ばめん}で、マタイ福音書^{ふくいんしよじゅうきゅうしやう} 1 9 章 5、6 を引用^{ろく いんよう}して、牧師^{ぼくし}は次^{つぎ}のように言^いいます。

「私^{わたし}は、父^{ちち}と子^こと聖霊^{せいれい}の御名^{みな}によって、ここ^こに立^たっている男性^{だんせい}と女性^{じょせい}が夫婦^{ふうふ}であることを宣言^{せんげん}します。『神^{かみ}が結^{むす}び合^あわせてくださ^くったものを、人^{ひと}は離^{はな}してはならない』」。

そして、「宣言^{せんげん}」の後^{のち}、新^{あた}しく夫婦^{ふうふ}にな^だった男性^{だんせい}と女性^{じょせい}を紹^{しょう}介^{かい}して、牧師^{ぼくし}は次^{つぎ}のよう^いに言^いいます。

「ただいま誕生^{たんじやう}した、新^{あた}しいご夫妻^{ふさい}を紹^{しょう}介^{かい}します。皆^{みな}さま、あ^あた^たか^かも拍^{はく}手^{しゅ}で祝^{しゅく}福^{ふく}してくださ^くい。」

すると、花婿^{はなむこ}と花嫁^{はなよめ}はス^おテ^{はくしゅ}ー^{さんれつしや}ジ^{みな}から下^あり、拍^あ手^{いだ}を^{ある}し^{たいじやう}て^{はなよめ}いる参^{きやうかい}列^{いみ}者^{はなむこ}の皆^{しゅ}さ^{いみ}ん^{こんしゅうかやうび}の皆^{まな}さ^{せいしよ}ん^かの^{きやうかい}間^{きやうかい}を^{きやうかい}歩^{きやうかい}いて退^{しゅ}場^{しん}し^{すく}ます。花^{ひと}嫁^{けっこんしき}は教^{てんごく}会^{いみ}を意^{けっこんしき}味^{さいご}し、花^{ぼめん}婿^{はなよめ}は主^{はなむこ}イ^{いつしよ}エ^おス^{しゅ}・キ^{しん}リ^{すく}ス^{ひと}トを意^{けっこんしき}味^{てんごく}す^{いみ}ると、今^{けっこんしき} 週^{さいご}火^{ぼめん}曜^{はなよめ}日^{はなむこ}に学^{いつしよ}び^おま^{しゅ}した^{しん}ね。聖^{すく}書^{ひと}に書^{しゅ}いて^{しゅ}ある^{しゅ}教^{しゅ}会^{しゅ}と^{しゅ}は、主^{しゅ}イ^{しん}エ^{すく}ス^{ひと}さ^{しゅ}まを信^{しゅ}じて救^{しゅ}わ^{しん}れる^{すく}人^{ひと}た^{しゅ}ち^{しゅ}のこ^{しゅ}と^{しゅ}です。結^{しゅ}婚^{しん}式^{すく}の^{ひと}ス^{しゅ}テ^{しん}ー^{すく}ジ^{ひと}は天^{しゅ}国^{しん}の意^{すく}味^{ひと}です。結^{しゅ}婚^{しん}式^{すく}の^{ひと}最^{しゅ}後^{しん}の^{すく}場^{ひと}面^{しゅ}で、花^{しゅ}嫁^{しん}が花^{すく}婿^{ひと}と一^{しゅ}緒^{しん}にス^{すく}テ^{ひと}ー^{しゅ}ジ^{しん}から下^{しゅ}り^{しん}る^{すく}のは、主^{しゅ}イ^{しん}エ^{すく}ス^{ひと}さ^{しゅ}まを信^{しゅ}じて救^{しゅ}わ^{しん}れた^{すく}人^{ひと}た^{しゅ}ち^{しゅ}が主^{しゅ}イ^{しん}エ^{すく}ス^{ひと}さ^{しゅ}ま^{しゅ}と一^{しゅ}緒^{しん}に、罪^{しゅ}が滅^{しん}び^{すく}て新^{ひと}しくな^{しゅ}った^{しん}地^{すく}上^{ひと}に、天^{しゅ}国^{しん}から下^{すく}り^{ひと}て^{しゅ}くる^{しゅ}こ^{しゅ}と^{しゅ}を意^{しゅ}味^{しん}し^{すく}ます。黙^{しゅ}示^{しん}録^{すく} 2 1 章 1、2 節^{しゅ}を^{しゅ}読^{しゅ}み^{しゅ}ま^{しゅ}し^{しゅ}う。

「わたしはまた、新^{あた}しい天^{てん}と新^{あた}しい地^ちを見^みた。最^{さい}初^{しよ}の天^{てん}と最^{さい}初^{しよ}の地^ちは去^さって行^いき、も^うは^うや海^{うみ}もな^{うみ}く^{うみ}な^{うみ}った。更^{さら}にわたしは、聖^{せい}なる都^{みやこ}、新^{あた}しいエルサレ^おム^おが、夫^おのた^おめ^おに^お着^き飾^{かざ}った花^{はな}嫁^{はなよめ}のよう^{よう}に用^{よう}意^いを^い整^とて^と、神^{かみ}の^{かみ}も^{かみ}と^{かみ}を^{かみ}離^{はな}れ、天^{てん}から下^{くだ}って来^くる^みのを見^みた。」

永^{えい}遠^{えん}の御^み国^{くに}は、新^{あた}しくな^{あた}った地^ち上^{じやう}で始^{はじ}ま^{しん}り^{すく}ます。信^{しん}じて救^{すく}わ^{しん}れた^{すく}人^{ひと}た^{しゅ}ち^{しゅ}と主^{しゅ}イ^{しん}エ^{すく}ス^{ひと}さ^{しゅ}まとが、神^{かみ}さ^{かみ}まによ^{かみ}つて^{かみ}結^{むす}び^あ合^あわ^あさ^あれて、御^み国^{くに}は永^{えい}遠^{えん}に続^{つづ}く^{つづ}の^{つづ}です。

エフェソ書^{しよごしやうさんじゅういち} 5 章 3 1、3 2 節^{さんじゅうにせつ}を読んでみましょう。

『それゆ^{ひと}え、人^{ちち}は父^{はは}と母^{はな}を離^{つま}れて^{むす}そ^ふの妻^{ふたり}と結^{いったい}ばれ、二^{しん}人^びは一^い体^だとな^いる。』この神^{しん}秘^びは偉^い大^{だい}です。わたしは、キ^{きやうかい}リ^{きやうかい}ス^{きやうかい}トと教^{きやうかい}会^{きやうかい}につ^{きやうかい}いて述^いべ^いて^いい^いる^いの^いです。」

妻^{つま}と夫^{おっと}は、愛^{あい}するこ^いと^いに^いお^いて^い一^い体^だです。救^{すく}わ^{しん}れた^{すく}人^{ひと}た^{しゅ}ち^{しゅ}と主^{しゅ}イ^{しん}エ^{すく}ス^{ひと}さ^{しゅ}まも、愛^{あい}するこ^いと^いに^いお^いて^い一^い体^だです。

ひと　ひと　あい　　ひと　かみ　あい　　おな　　たいせつ　　あい　　えいえん　　かみ
人が人を愛することは、人が神を愛することと同じぐらい、大切です。愛することは永遠に続くのです。神
さまが愛の御方なので、私　たちも愛することができます。神さまが永遠の御方なので、私　たちにも永遠のいのち
が与えられています。神さまの恵みによって一体になることは、すてきなことです。

7. 金曜日：さらなる研究

わたし　ふうふ　けっこんしき　せいしょ　こうかん
私　たち夫婦は、結婚式で「聖書の交換」をしました。

わたし　ふうふ　かてい　けっこんしき　こうかん　せいしょ　つか
私　たち夫婦は、家庭礼拝では、結婚式で交換した聖書を使います。

けっこんしき　こうかん　せいしょ　わたし　ふうふ　きょうかい　も　い　　きょうかい　も　い　せいしょ　べつ　せいしょ
結婚式で交換した聖書を、私　たち夫婦は教会に持って行きません（教会に持って行く聖書は、別の聖書
です）。

けっこんしき　こうかん　せいしょ　わたし　ふうふ　かてい　せいしょ　つか
結婚式で交換した聖書を、私　たち夫婦は家庭礼拝のための専用として使っているのです。

かみ　おと　わたし　かみ　つま　つま　わたし　ふうふ　かてい
神さまによって夫になった私　であり、神さまによって妻になった妻であることを、私　たち夫婦は家庭礼拝
でいつも思い出すことができます。

おと　かちかん　せいしょ　つま　かちかん　せいしょ　かてい　かちかん　せいしょ
夫の価値観が聖書で、妻の価値観も聖書で、家庭の価値観が聖書なら、すてきですね。

こんしゅう　だい　おと　つま　じゅうじか　もと　とも　い　　せいしょ　か　　じゅうじか　しゅ
今週の題は、「夫と妻——十字架の下に共に生きる」でした。聖書に書いてある十字架の主イエスを、

おと　つま　とも　れい　い　　い
夫と妻が共に礼拝しながら生きることは、すてきなことです。